

連載へまつやま 人・彩時記⑫

松山をこよなく愛した文化人

元松山中央放送局長
再建初代 松山観光協会理事長

多田 不二

元四国郵政研修所長
伊予史談会会員
山崎 善啓

一、多田不二の年譜

- 明治26・12・15 茨城県結城町に生まれる
- 大正5・7 旧制第四高等学校(現金沢大学)文科卒業 (23歳)
- 大正8・7 東京帝国大学文学部心理学科卒業 (26歳)
- 大正9・3 時事新報社に入社
- 大正13・7 時事新報社を依願退職
- 大正15・3 東京放送局放送部に入局 (33歳)
- 昭和16・1 日本放送協会業務局講演部長
- 昭和18・8 大阪中央放送局放送部長
- 昭和19・7 松山放送局長 (51歳)
- 昭和19・9 日本放送協会理事(役員)
- 昭和20・1 松山放送局が四国を統轄する中央放送局に昇格、松山中央放送局長(理事)となる
- 昭和21・5 戦時放送の責任をとり、理事全員が自主的に総辞職
- 昭和22・5 松山観光協会を再建し、理事長に就任 (53歳)
- 昭和22・10 愛媛県観光協会連合会を創設し、専務理事を兼任
- 昭和24・6 全日本観光連盟四国支部常任理事に就任
- 昭和25・6 愛媛県観光協会連合会理事長に就任、同連合会は8月に愛媛県観光連盟と改称
- 昭和28・5 松山観光協会改組により退任
- 昭和33・6 愛媛県文化財保護審議員委員に就任
- 昭和34・6 愛媛県観光連盟専務理事



晩年の多田不二

二、詩人 多田不二

多田不二は、旧制第四高等学校在学中の21歳ころから詩作をはじめた。昭和26年に刊行された「世界現代詩辞典」では、多田を次のように紹介している。

「多田不二、茨城県に生る。東京帝大心理学科卒、一九一四年ころから詩作をはじめ「帝国大学」に

- 昭和39・6 就任 愛媛県観光連盟改組により退任、以後嘱託として協力
- 昭和41・5 全日本観光連盟四国支部顧問に就任
- 昭和41・11・3 教養番組の基礎確立の功績により勲四等瑞宝章を受章 (73歳)
- 昭和42・8・1 国際観光年「観光の日」記念行事で運輸大臣表彰を受賞 (74歳)
- 昭和43・12・17 心筋梗塞で逝去 (76歳)

作品をよせ、次いで「感情」同人として多数の詩を発表したほかデエメルの作品を翻訳紹介し、詩集「悩める森林」(一九二〇・感情詩社)を刊行、詩話会会員となつて「日本詩人」「日本詩集」に寄稿すると共に「帆船」を主宰した。第二詩集「夜の一部分」は神秘的傾向を帯びた独自の詩風として注目され、その後も数多くの作品を発表したが、やがて日本放送協合理事、松山中央放送局長等に勤務して詩作から遠ざかった。

昭和31年10月20日の愛媛新聞芸欄には、次のような紹介文が掲載されている。

「多田不二(六三) 松山市道後祝谷に住む詩人。21年に松山中央放送局長を辞任して放送界を退き、児童文化協会を結成して数年間地方児童の文化向上につとめ現在は県観光連盟の理事長をつとめている。かつては萩原朔太郎、室生犀星などと詩誌『卓上噴水』や『感情』の同人として近代人の重苦しい絶望感や幻想と現実の交錯した心霊の世界をうたつて注目をひき、また新神秘主義を提唱した詩誌『帆船』を主宰して大正末期の誌壇に新風を吹きこんだ詩人として広く知られている。現在は詩筆を絶ち観光事業に打ちこんでいる。」

二の次女、多田暉代さんによって『多田不二著作集 詩篇、児童文学・評論篇』の二巻が一九九八年に出版され、不二文学の全体像が明らかにされた。

詩篇に収録の詩は、「悩める森林」52篇、「夜の一部分」53篇、その他186篇であるが、その大半は、大正・昭和初期の作品である。児童文学・評論篇には、童話・少年少女小説が17篇、児童劇が24篇、評論が37篇、人物記・随想が30篇収録されている。誠に多様な文学活動であったことがうかがえる。

多田は、大正から昭和初期にかけて新神秘主義を提唱し、不可解な心霊の世界を追求した思索的な詩を数多く残した。多田の詩人としての特徴は、膨大な詩作の中に戦争讃美・戦争協力の詩を一篇も残していないことである。逆に大正12年ころ、次のような人類の未来を憂える激しい語調の詩を書いている。

「世界の一点に立つて」
どこにやさしい人類愛はひそんで居るのか



詩集「悩める森林」

どこにうつくしい眠りは私達を待ってゐるのか
人類の心に真の平和の充される日はいつなのか
人は何故集団の利欲に支配されなければならないのか
おお まだ／＼血が流れてゐる恐ろしい惨禍の血潮が

私はいま世界の一点に立つて
砥がれた多くの爪が相争ふさまを
目撃する

人は不自然の死をすら賛美する
不名誉な世界人はかれらの正義をどう夢みてゐるのか
愛国心を殺戮の事実によつて何故証明しようとするのか
国家的虚栄の奴隷に満足する人々よ

私は 人間の最終の平和は決してあなたの方の考へてゐるやうな
仮想された勝利ではあるまいと思ふ
(詩篇262頁より)

平和主義者—多田は心の中では戦争反対を唱えていたのではなからうか。太平洋戦争に突入してからは詩作から筆を絶っている。

三、放送局長 多田不二

太平洋戦争は、昭和18年ころ日増しに日本が不利となつてきた。この時期政府は、地方行政の地域ブロックによる推進体制が必要と判断し、18年7月1日付で地方行

政協議会を設置し、四国地方行政協議会は愛媛県に置かれた。

昭和16年3月、広島中央放送局管轄として開局した松山放送局は、地方行政協議会と連携を密にするため、18年12月大阪中央放送局へ移管され、同局分室として中央局主管事務の一部を分掌することとなった。

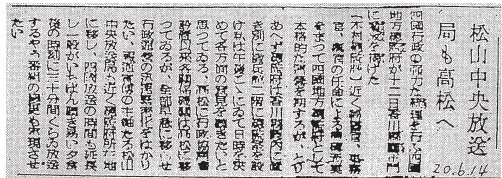
多田は19年7月、松山放送局長に発令された。これは翌20年1月に中央放送局昇格を見越しての人事であった。9月には日本放送協会理事(役員)に就任した。

19年11月7日の愛媛新聞には、多田局長の談話として「四国の各局を一元化して運営し、四県下向けに編成された同一の松山放送を聴くことができることになる」と発表している。

当時の放送局は小栗町にあった。19年ころから松山でも食糧事情が悪化し、職員は局舎周辺の空き地で野菜を作り、農繁期には農家の稲刈の勤勞奉仕にも出かけた。男子職員が召集されると、女子の技術員や放送員(アナウンサーは禁止用語)が誕生した。

多田は、四国を管轄する中央放送局長として職員を督励して電波を守るためにまさに不眠不休の日々であった。

20年4月、松山通信局の高松移転問題が発生したが、松山通信局が移転すれば松山中央放送局も高



昭和20.6.14 愛媛新聞

松移転になる。これを心配した多田は、20年5月全国中央放送局長会議に上京の際、通信院総裁に通信局を松山に存置するよう陳情した。当時の香川県知事は松山中央放送局の高松移転に相当

執着していた模様が新聞記事からうかがえる。
太平洋戦争は20年8月終戦、21年5月、多田局長など日本放送協会の理事全員は、戦時放送の責任をとって自主的に総辞職した。

四、観光協会役員 多田不二

NHKを退職した多田は、故郷の茨城県に帰らず、わずか二年たらずの勤務地であった松山を永住の地と決めた。道後温泉をこよなく愛していた多田は、23年には祝谷(現祝谷一丁目)に新築転居した。

昭和22年、多田は「これからの平和日本は観光事業に力を注ぐべきだ」と力説し、市の有志に働きかけ、松山観光協会を再建し、理事長に就任した。その後、多田は松山の観光開発に努めたが、彼の尽力した観光資源の開発は次のと

おりであった。

昭和23・4 月刊誌「観光の愛媛」(創刊号)を編集発行、県下各地の観光資源のPRに努める。43年11月死去前月まで継続

昭和23・11 初の坊っちゃん祭開催に尽力(主催松山観光協会)

昭和24・3 道後公園内に一茶の句碑建立に尽力(主催松山観光協会)

昭和24・4 国鉄松山駅前に子規の句碑建立に尽力(主催松山観光協会)

昭和26・10 子規句碑を正宗寺内再建に尽力

昭和27・2 井上正夫の記念碑を松山市駅前建立、発起人として尽力

昭和31・3 観光図書「観光の愛媛」を県観光連盟が発行、編集担当



月刊誌「観光の愛媛」

これらの実績は、多田の観光事業に取り組んだ一端であるが、句碑建立はまさに俳都松山にふさわしい業績であった。

JR松山駅前の子規句碑は、松山に降り立つ旅人に松山のシンボルとして目に映る。この句碑建設の推進役が多田であったことを思うとき、多田の観光事業にかけた情熱が偲ばれる。